

特 112

498

齋木延次郎著

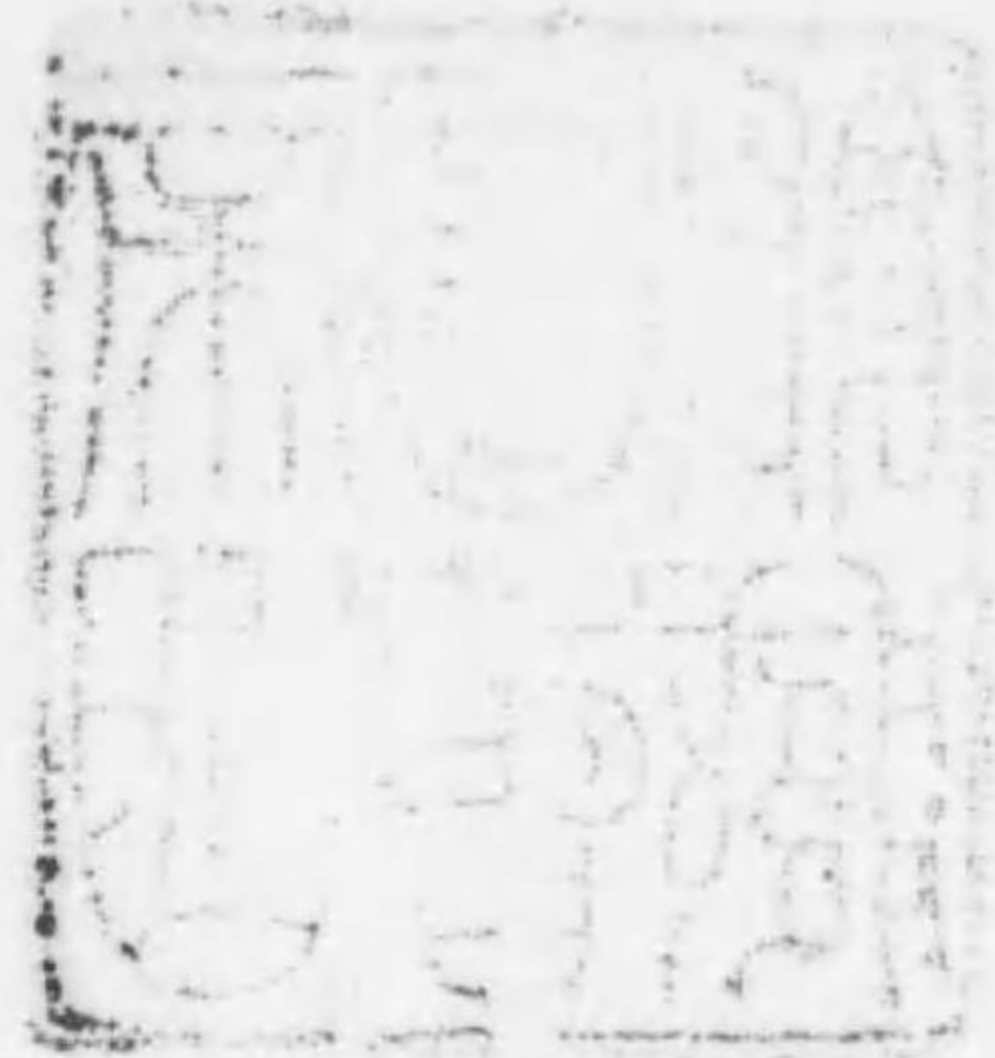
ロギステイツク



始



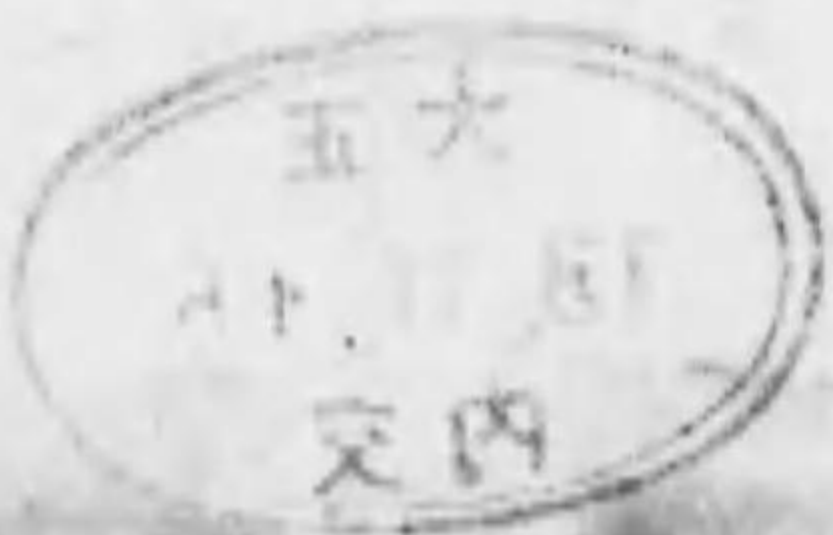
特 112
498



目次

十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
結	宗	倫	心	論	科	形	哲	數	物	序
論	教	學	學	學	學	學	學	學	學	學
.....
三	〇	〇	八	七	五	二	三	三	一	一

大正
13.11.15
内交



ロギステイツク

齋木延次郎著

一、序論

本論文の目的は數學的形式を使用して先驗的哲學の問題を料理するに在り。今假りに之をロギステイツク論理計算の名を以て呼ぶこととせり。數學的哲學と云ふも固より不可なし。

抑も予の此の研究に志せる動機は比較宗教學上の必要に起れるものにして、かの有名なる三一の問題の解釋を爲さんとするに基づく。蓋し佛教の佛陀三身の教理、基督教の三位一體の教理、儒教の天地人の三才等、各々其の關心を異にし、其の表現を異にし、又歴史的背景を異にするものありと雖も、亦一道の論理的脈絡無きにもあらず。例へば第一位の通じて抽象的なる如き、第二位の具體的性質を帯ぶる如き、第三位の第一位と第二位とを背景として解釋せらるゝ如き種類のものなること（例へば聖靈の父と子よりのプロセスジョンの如き、又は人は天地の間に漠として生まると云ふ思想の如きを指す）之なり。予は數學的形式を以て思想の本質を表現せんと發心せるなり。

又此の思想を助長したるものは、普通の哲學的用語の多岐性なり。予は議論は用語の意義の不鮮明より來るもの多きを思ひ、之に打ち克つに數學的形式の優れたるを思ひたり。カントが哲學は數學の如く

胃はずと云ひ、又哲學が常に勝敗常なく、アレナは常に次々の優者によりて占領せらるゝ觀あるに、其の姉妹學たる數學は駁々として進歩することを羨める言に徴して、惟へらく是れ哲學の武器の數學の精銳なるに如かざるが爲なり、否哲學の言辭が數學の如き確定性を持ち難きが爲なり。既に確定性なし、是れ眞理の確定性を爲し得難きなり。哲學に眞理なきにあらざるなり、之を眞理なりと把住するの性難きなりと。

此に於てか、予は哲學の數學的形式化を思ひ立てり。従つて予は世界のロギスティックの研究に没交渉なれども、其の内容ロギスティックに相當せるものを得たり。而して今や其の組織完備せりと信ず。是れ本論文を草する所以なり。

先驗哲學はカントの純粹理性批判に於て指摘せる如く完結性を有す、所謂別箇の天地なり。予の論文はカントの純粹理性批判の問題に觸るゝ所大なり。故に予は特に此の點に觸れて論文を遣らんとす。讀者之を諒せよ。

尙此の機に際して、數學と哲學との關係史に對して一言の辭を費す、亦自然なるが如し。ターレスが哲學の元祖なると共に數學者なりしは傳説の語る所なり。ピタゴラスが哲學と數學との兩者に兼ぬる所ありしは顯著なる事實なり。即ち所謂數を宇宙の根本的眞理なりとする論はその含蓋する所深し。その如何なる意味に於て其の價値を認むべきやは本論文全部の讀了によりて自づから知らるゝ所ならんと信ず、但し予は其の迷信的誇張の類は廢す。プラトーンの晩年にいたくピタゴラスの數學説に影響せられたること、さては幾何學を學ばざるものは我が門に入ること勿れの揭示は人口に膾炙す。新プラトーン

派にも多少の數學的關心あり。ニコラウス・クザヌスは無限と云ふ思想を以て哲學的關心の中心となせり。ガリライ・ガリレオが自然は數學的記號にて書かれたる書物なりと云ひ、ニュートンが萬有を數學的に研究せんとしたる、デカルトが解析幾何學を發明したる、ライブニッツが微積分學に於てニュートンと共に其の發明者たるの月桂冠を戴く、さてはスピノーザが幾何學的方法にてエティカを書ける、カントが數學及び數學的自然科學を以て眞理の標準となせる、新カント學派のゴッエンが微分の法を使ひて彼の創成原理を説明せんとするが如き、ポアンカレが數學的認識を批評するに力を注げる、近くはパートランド・ラッセルが其の數理哲學序論に數學は成熟せる哲學なりと叫びたる如き皆數學哲學關係史中の著名なる事柄なり。

二、物 理 學

茲に物理學と云ふは、予が研究の途上算術級數の公式上に於て、斯く斯くの式は例へば物と云ふことを意味すべし、斯く斯くの式は運動を意味すべし、斯く斯くの式は空間を意味すべし、斯く斯くの式は時間を意味すべし、斯く斯くの式は宇宙と云ふことを表現するに足るべしとやうに觀取したるを包括する目的にて、之に物理學と云ふ名を與へたるものにして、其命名は特殊の事情に基づけるものにして、概して物理學的と云ふ程の意のものと見られたし。此の次に論ずる數學的、又其の次に論ずる哲學的等も亦狹義の使用法なりと承知ありたし。即ちそは予の所謂物理學、數學、哲學にて、此等の命名を使用して予の學說全體が言明せらるゝ便宜となるものなりとの意に解せられたし。即ち其の命名は予の個性

の發揮なり。予は予の學說全體に對して、又其部分に對して絶對の責任を有す。然れども其の言語上即ち命名上の約束は斯く特殊のものなることを承知ありたし。是れ誤解を恐れて一言辯ずる所以なり。さて本問題の哲學上の關心は、カントの物其れ自身の問題に關係す。ヤコビーが言ひけん如く、物其れ自身の假定なしにはカント哲學には入り難く、又之ありてはカント哲學に止ること能はずと云ふものはなり。予は是を算術級數の公式上より發明せる次の諸式の關係する範圍なりとなすなり。

$$\begin{aligned}
 x &= 1 - (n-1)d \dots\dots\dots \text{物} \\
 x &= \frac{1-a}{n-1} \dots\dots\dots \text{運動} \\
 x &= a + (n-1)d \dots\dots\dots \text{空間} \\
 x &= \frac{1-a+d}{d} \dots\dots\dots \text{時間} \\
 x &= \frac{n(a+1)}{2} \dots\dots\dots \text{時間}
 \end{aligned}$$

a は初項 d は等差、1 は終項、n は項數、s は總和なり。今例へば

$$x = a + (n-1)d \dots\dots\dots \text{空間}$$

と云ふことを例解せんに、a を物の大きとし、コーを實際運動に使用したる時間の大きとすれば、x は此の問題が關する限りの空間と稱することを得べし、然るに a d n 皆字母を以て所謂代數學的に現され居るを以て、之は一般に空間なるもの、定義と考へて可なり。x と云ふは $a + (n-1)d$ が何を意味するかを問ふを以て足れりとして、未だ之を一定の數値と關係せしめてイタオーリタイを肯定するもの

にあらざることを表現せんと欲したるなり。其の注意の理由は次章數學を論ずる所に明瞭とならん。即ち予は數値の問題に關せずして、式其者の上に吾人が觀取すべき一定の意義ありと主張せんと欲するものなり。而して上例の如きは即ち吾人に空間 space の意味を表示するを爲すものなり。 $x = 1 - (n-1)d$ は空間より運動の大きに運動の時間即ち全時間より静止の時の時間を除けるものを乘じたる全運動量を引けるものは、運動體其者の大きを語るものなりと云ふべし。而して此の場合運動體が石の如き大きさあるものなるか、點の如き大きさなきものなるかは、物理學の間はざる所なり。次には $x = \frac{1-a}{n-1}$ は次の如く解釋すべきものなり。空間より運動體の大き其の者を引きたるものを運動時間にて除すれば、運動量其の者を得と。次に $x = a + (n-1)d$ が空間を意味することは既に述べたるを以て之を略するとして、 $x = \frac{1-a+d}{d}$ を説明せんに、こは空間より其の運動體自身が占めて居る大きを引き之に運動量の單位を加へ、假りに其の物が静止の瞬間に一運動をなしたるものと假定して、之を即ち運動の單位にて除すれば静止せる時をも一と數ふる全般の時間其の者を得べき理なり。故に之を以て時間の定義とす。最後に $x = \frac{n(a+1)}{2}$ を解釋せんに、之は

$$\begin{aligned}
 &a + d \\
 &a + 2d \\
 &a + 3d \\
 &\dots\dots\dots
 \end{aligned}$$

n項まで

の總和を求めたるものなるを以て、是れ物體運動の各現象の總和なりと云ふべし、故に Das All を意味する宇宙と見る毫も不可なきなり。此處の表現も亦代數學的なるを以て一般的なればなり。而して $\frac{n(a+1)}{2}$ は運動體の大きさに空間を加へたる量ありと想像せよ、然るに之と同様なる量が $a, a+d, a+2d, a+3d, \dots$ に於ては n 對得らる、都合なるを以て、 $\frac{n(a+1)}{2}$ なる式を得たるものにして予は此を宇宙の觀念なりと考ふ。支那人が古往今來之を宙と云ひ、四方上下之を宇と云へるも考へ合せて面白し。

予は固より此處に云ふ物理學的空間及び時間が、カントの所謂直觀の形式としての空間時間とは考へず。何故なればカントのは單一的なればなり。然れども予は寧ろ之を以て Dinge an sich に擬するものなり。何となれば此處には物の概念あればなり。而して他のものも此の概念と同じ平面上に立つ概念なればなり。廣義に之を Dinge an sich と稱する又何ぞ妨げん。カントは時々 Urding だの、Gedanken Ding だのと云ふ言葉を用ゐた。予は無論 a を物と云ひ、d を運動と云ひ、l を空間と云ひ、n を時間と云ひ、s を宇宙と云ふて居るのであつて、a l n s を狹義の物 a と混同するものではない、然し Dinge an sich 云ふ廣いエッセンスプレッションなら苟も物理的と云ふ所に共通な所があるならば之を入れて可なりと信するのである。然し予の學說の叙述が主であつて、カントの學說との比較は従であつて、従つて前者には絶對的の價値があり、後者には相對的の價値があることに過ぎぬことを宣言して置く。而も

カントの學說との比較を割愛すること能はざるものは時勢であつて、又益であると信するものである。之は此處のみの爲でなく、全體に亘つて必要があるので此處で言つて置く。

予は本章に論じたる如きものを物理的判斷と名づく。吾人若し理性推論を恣にすることを許さるれば予は此の判斷は先天的選言的判斷なりと言はんと欲す。何となれば

a は 0 或は n なり
x は a なり
故に x は 0 或は n なり

故に予の立言は妥當するを見ん。之を以て予は物理學に於ては例へば動體が 0 なるか n なるか、例へば點又は石の如きものなるかを問はざるものなることを知る。

三、數 學

予が特に數學と稱するものは

$$\begin{aligned}
 a &= 1 - (n-1)d \dots\dots\dots \text{初項} \\
 d &= \frac{1-a}{n-1} \dots\dots\dots \text{等差} \\
 l &= a + (n-1)d \dots\dots\dots \text{終項} \\
 n &= \frac{l-a+d}{d} \dots\dots\dots \text{項數}
 \end{aligned}$$

$$s = \frac{n(n+1)}{2} \dots\dots\dots \text{蓋然}$$

の如き境を指示するものなり。即ち一例を舉げて $1||a+(n-1)d\dots\dots$ に就て言へば、 a と n と d とに一定の數値が挿入せらるゝ時 1 が決定せらるゝなり。故に公式 $1||a+(n-1)d$ に於ては方程式の右邊は原因を示し、左邊は結果を示すなり。即ち此の間に Causality を見る。換言すれば假言的判断を見る。而して條件的にて $1||0$ ともなり、又 $1||0$ ともなる、即ち其の數値の決定は右邊の條件によりて定まる。此の見地に立つものを數學となす。即ち數學は原因結果の規律なるが故に其の中に論理的時間を包有す。予は此の一境をカントの物其れ自身を受け入るゝ機能をも有すとす。時間論に擬へて見んと欲す。されば $a d l n s$ は結果なり、故に其の數値は右邊に依屬す。敢て自主あらざるなり。故に條件の結果としては $0||0$ も亦可能なるべし。唯現實の命する所のみ。此の境を特に數學の境と云ふ。何となれば計算の結果の表示に拘ればなり。物理學の境は永遠に選言的なり。決するに由なし。數學の境は二者其の一に決す。而も原因に則してなり。従つて 1 が真なる時 (例へば $0||0$ なる時) 他は偽なり。 ($0||0$ は偽なり) 然れども時あつてか $0||0$ にして、又時あつてか $0||0$ なるべし。是れ假言的綜合的判断の境涯なり。若し言ふべくんば物理學の境涯にありては、 $0||0$ 或は $0||0$ の如きは可能的として措定せらる。然るに數學の境涯にありては $0||0$ 或は $0||0$ は現實的に措定せらる、即ち其の場合 1 にて孰れかに決定せらる、然れども無條件的には措定せられず。されば物理學の境涯は論理的には可能的の世界と云ふべく、數學の境涯は現實的の世界と云ふべし。豈是れカントの物其れ自身の世界と予の所謂物理の世界との合一を裏書するものにあらずや。何となればカントは物其れ自身の世界を以て斯る種類の世

界と考ふればなり。カントの物其れ自身に對する不可識論的立場は之に對する論理的批評と見るべし。而も心理學的に、因縁として此の一境より出立し來ることを説くは、吾人が數學の世界又は今後述べるとする哲學の世界と稱するものを説く前に、先づ物理の世界を提起するが如し。彼是相棄つべからざるなり。一は價值の問題なり、一は實在の問題なり。之を要するに數學の世界は假言的綜合的判断の世界なりと云ふことを得。

四、哲學

古來より哲學の定義は多し、吾人が論じつゝある論文全體を哲學的なりと云ふも誰か否まん。然れども此處に云ふ哲學は極個人的趣味の表現で、予の系統にありては哲學本部は此處に在りと云ふ程の意味なり。

さて如何なるものを予は哲學と云ふやとなれば、假りに物理學、數學 (共に予の所謂) を夫れ 1 選言的綜合的判断、假言的綜合的判断の如きものを含み之を他の定言的綜合的判断を含む如き部類と合せて、方法論的意味を顯著に發揮するものとなせば、予の所謂哲學は正しく其の範彙に屬して、正に今缺乏せる定言的綜合的判断を代表する學なりとなすなり。

即ち

$$a = a \text{ (as a voluntary quantity) } \dots\dots \text{唯心論}$$

$$d \neq 0 \dots\dots\dots \text{唯物論}$$

1 # a,d 二元論
 n # 0,1,2 多元論
 s # a,d,1 一元論

を以て其の内容となす。蓋し $a d l n s$ 其の者（之に附與せる數値にあらず）の觀念を直に規定するを以て此の學の目的とす。數學の條件的なる善きコントラストを爲す。蓋し哲學は直接に $a d l n s$ の語義に應じたる特徴を表示するを以て目的とし敢て現實的に其の字母に附與せらるゝ數値を論ずるものにあらず、問題は必然的なる語其の者に附隨せる價値なり。例へば等差と云ふ觀念の起源を考ふるに、茲に $A B C$ の量あらんに $B - A = D, C - B = D$ ならんに、 D を等差とは云ふなり。而して差と云ふことは何等か實際的に一分でも一寸でも差異あるものより來りたる觀念なり。若し $A = B = C$ ならば、如何にも $D = 0$ なるべし。然れども是れ實は差の量が 0 なりと云ふことを云ふものにして、即ち無差なりと云ふに同じくして、 0 と云ふものが差と云ふ觀念の本質を現すと云ふ意味にてのブレイケートたり得と云ふ譯にはあらず、數學的關係と哲學的關係との相違は予に従へば此處にあり。數學は量の學なり哲學は概念の學なり、換言すれば本質の學なり。前者は偶然なり後者は必然なり。前者は融通が利く、後者は融通が利かず。然れども其の代りに前者には必然性が缺け、後者には之がある。蓋し前者は他律的なるに後者は自律的なればなり。其の結果は哲學史上に於けるソクラテスとソフィストとの關係の如し。前者は感覺本位（量）にして後者は概念本位（質）なり。故に前者は不定的にして後者は定的なり。前者は不易の知識を拒み、後者は之を主張す。今茲に一人の娘あらんに、父之に花子と命じたり。人あ

り其の娘の美ならざるを見て之を笑ふとせんに、父何ぞ之を意とするに足らん。何となれば此の場合名は假なればなり。然れども人若し娘を稱して息子なりと云はば如何。此の場合名は實を代表するものとして使用せらる。故に娘と息子との名の混同を許すべくもあらず。數學は假の名なり、哲學は實の名なり、何となれば數學は量を論じて、直に概念の本質を賓辭化することを要せず。然るに哲學は之を以て其の任務とす。ソフィストとソクラテスとの相違も之なり。數學は第二次的なり、哲學は第一次的なり。數學は假言命題にして、哲學は定言命題なり。

さて予の哲學的命題の哲學的意味たる唯心論とか唯物論とか二元論とか多元論とか一元論とかと云ふことなるが、之は予の *Deus* を以て哲學的語義に翻譯したるものなり。例へば初項の a は任意量として a に等しと云ふ如き、能く唯心論の風光を寫さずや。又 $\alpha \beta \gamma$ を以て唯物論を現すは名詮自稱なり。蓋し物質は諸種の態様を有し得と雖も、結局靈に等しからざればなり。純無形たること能はざればなり。予は哲學的觀念として唯心論及び唯物論の實在を共に承認するものなり、而して此の態度は總て二元論の肯定となる、既に唯心論と唯物論と二元論とを皆肯定すれば總て多元論を肯定すべき筈なり、故に多元論を肯定す、然り而して之を概括すれば既に一元論を肯定するものなり。斯く予は幾多のイズムを系統的に統一することを目的とす。予にはボレミックはなく體系あるのみ。

カントが *Das Gemüt* を説き、之に對する *Dinge* を説き、其の間に行はるゝ *affären* を説き、其處に生ずる不定なる *Die Erscheinung* を説き、遂に一定の *Die Erkenntnis* を説ける狀況、此處を説けるものとも思はるゝ節あり。予は兎も角も之を以て吾人の關心の代表的のものとし、此の系列に於ける其の

完備性を信ずるものなり。蓋し物と運動と空間と時間と宇宙とが物理學的にエグゾースティープであると同様又 $a d l n s$ が量に於てエグゾースティープであると同様、唯心論、唯物論、二元論、多元論、一元論、或は其のエクイバレンツは哲學界に於て完備性を有すると信ずるものである。尤も予の哲學と云ふ意味は形而上學其の他を除いて居るものであることを前以て斷りして置く。否予の系統では斯るものを以て絶對の哲學の内容とするのである。

之よりも更に大切なことは予の學說に於ける此の哲學の公式の空間性である。其れは數學の時間性に對して相互に其の特色を發揮する。それは數學に於ては、予の所謂公式の右邊が左邊を決定すること、なるので、其處に論理的の時間を含むのであるが、此處では其れに反して、例へば $a || b$ と云ふ時に、 d と o とは同時に存在して居らねばならぬ。カントは時間式を船の上流より下流へ下るに必ず上流にあること先にして、下流にあること後なりとの比喻を以てし、空間性を家を見るのに上より下へ見るも下より上を見るも自由であるとなした。即ち時間に於ては論理的に因果あるを以て足りとし、空間に於ては同時存在を要求した。予は此等の論は究竟論理的に解し去るべきものと信ずる、換言すれば、カントの議論の歸する所は究竟論理的の時間論理的空間を意味すること、信ずる。然らば論理的空間とは何かと云へば主辭と賓辭との同時存在である、換言すれば、主辭若くは賓辭の各々が他方の結果にあらざるものを云ふのである。此の意味に於て哲學的判斷は同時的である、即ち空間的である。

以上の議論を以て予は哲學は定言的綜合的判斷であることを宣言するものである。

五、形而上學

形而上學は密に哲學に連り、哲學にて a (初項) $= a$ (中項) と云へるより、初項の一定の數値を得べき場合は n 度なることを知り、さらば初項の數値を得べき場合は n 度の中の n 度である、即ち除外例なきものである。之を $a || o$ で表示する。之と同様に $a || a$ から、 d は a に比して一つだけの例外があるものとして、 $a || a$ として其の制限數を現す。次に $a || a, d$ は一の算術級數に於て實際 a と d とは一つづゝしかあり得ないから、結局 1 には a に等しからず、 d に等しからず、即ち或 a に等しからず、或 d に等しからずで、二つの障壁あるものとして、之をも $a || a$ として表はす。次に $a || a, d, o, 1, 2$ は $a || a, 3$ にて表はし、又 $a || a, d, 1$ は 1 の時と同理にて、畢竟一算術級數に於て $a d l$ は一種宛にきまつて居るから現實の制限は三つであつて、 $a || a, 3$ と表示せられる。其處で予は次の表を得る。

$a a o$	主觀的
$a a 1$	客觀的
$a a 2$	相對的
$a a 3$	絶對的

之を主觀的、客觀的、相對的、絶對的と評する所以のものは、 n が時間の總なる意識より來る。凡そ物 (a) あれば一の時間あり。然るに $a || o$ は時間の無き場合を想像するものなるを以て、從つて物なし。故に此場合には主觀的なり。即ち物、客觀なくして、唯ざる主觀のみある世界なり、即ち $a || o$ と云ふ觀念のみある世界なり。然るに $a || a$ 1 に於ては時間が一なるが故に、之は物 (a)

の存在を意味す、然り物が單に存在して居る状態を示す。之れ客觀的なりと云ふ所以なり、即ちaは存せるなり。前の時には未だaは存せざりしなり。さて $\text{Co}(n) \parallel n$ に至りては、二つの時ありと云ふが故に、一は物質存在の時にして、他は物質運動の時なり。aとdとを包攝せる時なり。故に之を相對的と云ふ。其の中に物質の存在と(即ち静止と)運動とが對立すればなり。次に $\text{Co}(3) \parallel 3$ は、時三つと云ふを以て、物質存在の時、運動の時、更に加ふるに此の兩者が結合して空間を成就するの時(何となれば空間は $\text{X} \parallel \text{a} + (\text{no}) \text{d}$ と云ふは我等の定義なればなり)を含む。此の域に於ては物質の存在と云ふと運動と云ふとが最早對立的にあらずして合一的となれるを以て之を絶對的と云ふ。

斯くて基数は0123世界の四期を現すなり。古來之に觸れたる思想は諸所に散見せらる。0123に依りてadlnsの境を逆睹するを見れば、(1の既に存在する時には即ち $\text{Co}(3) \parallel 3$ には、 $\text{Co} \text{a}, \text{1}, \text{2}$ のno、shad,1のsも、例へば $\text{a} = \text{od} = \text{1}, \text{1} = \text{2}$ と考へ得るが故に既に存在せるなり)何等かカントのコペルニクスの轉回に似たるものありと云ふことを得ん。之を要するに、主觀、客觀、相對、絶對のPoints of viewが此處に指摘せらるゝなり。著しく宇宙觀的色彩を見る。

若し靜と動、客觀と相對とが斯く其の特徴の上よりコントラストと考へらるれば、絶對はアンテイノミーの境とも云ふべく、主觀は其のソリュージョンとも云ふべきか。カント哲學の唯理的宇宙論は此の種の觀法に類するが如し。吾人は之を前言へる如く、主觀、客觀、相對、絶對としてシステマティックに理解して、之をPolemikとして探らす。

六、科 學

數學のadlnsの中a(初項) = a(任意項)との哲學的思惟に基づき、oとなり得る可能性を有するaを除きたるdlnsを縦軸とし、形而上學上のディクツムたる $\text{Co} \parallel \text{Co}$ 、 $\text{Co}(1) \parallel \text{1}$ 、 $\text{Co}(2) \parallel \text{2}$ 、 $\text{Co}(n-3) \parallel \text{3}$ の中に、 $\text{no} \parallel \text{0}$ を除く他のものを横軸として、兩者を結合することによりて、一群のものを派生す、之を科學と予は稱す。而して其の結合の數學的形式は乘法なり、何となれば縦軸と横軸とは共に新生のものに對して因子の地位を取ればなり。斯くて生ずるものは

- 1 X d = 1d.....第一
- 1 X 1 = 11.....第二
- 1 X n = 1n.....第三
- 1 X s = 1s.....第四
- 2 X d = 2d.....第五
- 2 X 1 = 21.....第六
- 2 X n = 2n.....第七
- 2 X s = 2s.....第八
- 3 X d = 3d.....第九
- 3 X 1 = 31.....第十

$$3 \times n = 3n \dots\dots\dots \text{第十一}$$

$$3 \times s = 3s \dots\dots\dots \text{第十二}$$

即ち此處に順序數を生ずる次第なり。さて此の順序數の Justification としては、哲學上 1 は d より後なり何となれば $1 \# a, d$ と云ふが故に d の存在は 1 の必要條件なればなり。次に $2 \# a, 1, n$ と云ふ。然らば n は 1 より後なり、何となれば項數なる觀念は終項ありて後起る觀念なればなり。(項數とは初項より終項までの項の數と云ふことを意味すればなり) 次に s は n より後なり。何となれば總和と云ふ觀念は等差級數の一定項數の總和にして、項數定らずして總和と云ふことは條件を缺けばなり、總和と云ふ觀念に矛盾すればなり。斯くて吾人は $d \mid n, s$ の間に論理的に順序のあるを見る。次に 1 2 3 の間には、其の生成上又一の秩序の存在を見る、即ち 1 なくんば 2 なく、2 なくんば 3 なし。即ち彼等の間には認識上秩序あり。此等の順序秩序は順序數の依據する基礎なり。然れども未だ其れ自らに順序數と云ふに足らず。何となれば論理的順序は必ずしも認識的順序に合致せず、又認識的順序も必ずしも論理的順序を保せざればなり。然るに 1 の係數の下にて $d \mid n, s$ に一定の順序を與へ、2 の係數の下にて $d \mid n, s$ に一定の順序を與へ、3 の係數の下にて $d \mid n, s$ に一定の順序を與へ、且つ 1 の組終りて 2 の組、2 の組終りて 3 の組とやうにせば、之ぞ縦軸と横軸とを應用せる理想的の順序が定めらるゝ事となるべし。此の域に在りては、例へば id は 1 の genus 中の d の species に在りとやうに定義することを得。予は此の境涯を稱して科學と云ふ。判断の性質より云へば、 $\text{No} \parallel$ 。以下の抽象的分析的判断と呼ぶべきに對して、 $1 \times d = id$ 以下は具體的分析的判断と呼ぶべきものなりと思惟す。

七、論理學

論理學の discipline は、科學の所産を

1 or d is n.....大前提
 id is 1 or d.....小前提
 Therefore id is n.....結論

以下之に教ふ

とやうに、證明することに存す。大前提は哲學及び形而上學の命題にて既に明なる所、小前提は科學の教ゆる所なり。今論理學は此の二前提によりて、 $id \text{ is } n$ と云ふ定理を證明するものなり。即ち其の目的は id と云ふ新觀念が又 n の範圍中のものであることを確めるものであつて、n の適用範圍の擴張に目的ありと云ふことを得。

今此の論理學の態様を通俗的なる一例によりてイラストレートすれば左の如し。

男或は女は人なり.....大前提
 夫婦は男或は女なり.....小前提
 故に夫婦は人なり.....結論

即ち夫婦は人なりと云ふ所に知識の擴張はあるなり。尙此の大前提及び小前提等の命題の性質に就て多少の考察を施さんに、大前提は認識の分類なり、小前提は認識の還原なり、結論は認識の擴張なりと云

ふことを得。蓋し大前提は人てふ大概念の外延の大なるを利用して、之に男或は女と云ふ小概念を分類せるなり。(I 或は d は n なりと云ふ中には I 或は d は o 中に分類せらるゝものにあらすとの意識あるものと見よ)次に小前提に於ては夫婦と云ふ小概念の内包の利用せられたるを見る。カントの所謂賓辭が主辭に隠されて横はれりと云ふ分析的判断は此の類なり。次に結論は内包の大なる小概念と外延の大なる大概念とをそれ／＼主辭賓辭として妥當せしめたる綜合的判断なり。蓋し男或は女は人なりと云ふも綜合的判断と言ひ得るに似たり。(斯く言ふはカントの綜合的判断に於ける場合の主辭と賓辭との關係に照して云ふなり。然れども此の大前提は普通論理學に云ふ選言的命題なり。而してカントの求めたる綜合的判断は定言的綜合的判断なり。故にカントの意圖に關しては之を除くことを得。否大前提の選言命題は予の見る所を以てせば、經驗的判断にして其の妥當性は經驗によりて是認せらるゝものなるが故に、寧ろカントの所謂後天的綜合的判断なりと思惟す。)

予は認識の擴張と云ふこと、善、認識の分類と云ふこと、眞、認識の還原と云ふこと、美と何等因縁あるが如く感ず。

八、心理學

吾人の論理學と稱するものは演繹法的形式を取れること上の如し。今歸納的形式を取れるものに心理學あり。即ち

I or d is a.

rd is a.

n is a.

Therefore x is a.

之は大前提より中概念を、小前提より小概念を、結論より大概念を研究の目的として取り、賓辭として a を持つて來て、第一前提、第二前提、第三前提に於て之を包攝せしめ、x なる概念を以て此の三概念を收結し、之を a に包攝せしめる仕掛である。之を俗解すれば、

男或は女は生物なり

夫婦は生物なり

人は生物なり

故に人間(?)は生物なり

茲には人間と云ふ語は男或は女、夫婦、及び人の共通概念として用ゐられたり。即ち只の人と云ふのは少し違ふ意味にて用ゐられたり。

抑も此の學の動機は中概念小概念の大概念に包攝せらるゝを學んで、更に大概念と所屬を檢せんとするものである。斯くて科學以來除外された a の概念は再び取り入れられて、x が a と云ふ廣汎なる斷定を得るに至つたのである。若し rd is n と云ふ斷定を前後に照して演繹的綜合的判断と名づけ得ば、x が a は歸納的綜合的判断と名づけることが出来る。

之を心理學と名づくる所以のものは、第一前提は中概念、第二前提は小概念、第三前提は大概念、結

論は概念——即ち中小大の三概念に共通なるものを含むからである。

九、倫理學

is a 之を倫理學の形式とす。蓋し is a は主辭も賓辭も共に一般的なるものなり。蓋し一般的なれば最早 x にあらずして a ならばなり。之を以て見るに、倫理學はカントの要求したる如く普遍的妥當的のマキシムの存在を要求するものなり。

十、宗教

宗教の觀念は藏する所極めて深し。吾人は吾人のロギスティックの最後に於て之に觸れんとす。又實に予が研究の動機なりとなり。

さて倫理に於て is a が保證せられたり。唯憾む、之れ形式にして、實質にあらざるを。即ちフィヒテが A || A に據らずして、Ego || Ego を提出せし如く、吾人は倫理學の一般的判斷に對して、特殊的判斷とも稱すべきものを要求し來るなり。吾人は ad ins と云ふ五形式を有すれども、數としては唯 0 1 2 3 が形而上學上の命題の賓辭として現れたるを知る。此に於てか、之を倫理學とを折衷して、即ち倫理學の形式に形而上學の結論の材料を併合して、茲に宗教的判斷を形成せんとす。即ち所謂特殊の Special たる判斷なり。そは

0 is 0.....抽象
1 is 1.....具體
2 is 2.....分析
3 is 3.....綜合

として指示せらる。さて何故に 0 is 0 を抽象と云ふやとならば、主觀的は抽象的と云ふ Attribute を附加し得べければなり。又客觀的は具體的と云ふ Attribute を附加し得べければなり。又相對的は分析的と云ふ Attribute を附加し得べく、絶對は綜合的と云ふ Attribute を附加し得べければなり。蓋し主觀的の時は物なし、故に主觀が平等に妥當す。されど物あれば差別を生ず、是れ具體的なる所以なり。次に相對的に於ては物と云ふ差別と運動と云ふ差別と兩種の差別に分析することを得、故に分析と云ふ。最後に絶對に對しては、此相對の差別が絶對の差別として結合してゐる、即ち綜合してゐる、故に之を綜合と云ふ。斯くて抽象、具體、分析、綜合の觀念は誕生す。蓋し人間至奥の觀念なり。

古來宗教上の形式此順序を追へるもの亦奇なりと云ふべし。例へばクレメントが『父は消極的にして知り難し、子は積極的にして知ることを得』と云ひ。又聖靈は父と子とより proceed すと説き、三位は一體なりと説くなぞ皆此の類なり。

東洋にては老子、始道生一、一生二、二生三、三生萬物と説く。其の旨深しと謂ふべし。日蓮は本有無作三身を説き、親鸞は法身般若解脱の涅槃の三徳を淨土和讃の始め三節に釋したりと稱へらる。嗚呼吾人は之を學術化して抽象、具體、分析、綜合と云ふ。其の歸は一なり。

十一、結 論

吾人は今ロギスティックを説き畢へたり。此の中吾人の純粹の理論と、カント其他諸家の意想を解釋したる二部を含む。前者は後者なくとも學說を成立し得るもの、後者は吾人の意見なり。讀者双方の權衡に於て顧る所あらんことを希望す。今日カントを論ずることは哲學者の義務と云ひて可なり。而も他人の學說を紂度するは容易の業にあらず。唯此の篇に於てはそれが參考的になされたるまでにして比較其の者が主たる意圖にはあらず。次に命名の嶄新なり。是れ又吾人の系統にては斯く云ふと云ふのみにして穴勝客觀的社會的の使用を制限せんとの意にあらず。否本質を述ぶる所に意ある而已。

之を内容より觀察するに、凡そ Philosophy of Mathematics 數學の哲學と稱する如きものと——物理學より哲學に至るまでを云ふ——The Mathematical Philosophy 數理哲學とも述ぶべき——形而上學より宗教に至る——ものを含蓄して居る。而して數理哲學とも目すべき部門は定義、公理、定理、系、補題、解にも似たるものを、それ／＼形而上學、科學、論理學、心理學、倫理學、宗教に於て觀察す、然り而して物理學、數學、哲學が關係する所のものは、寧ろ方法論的價值を有するものなるが如く感得せらる。是れ吾人が大觀に於て一言を費す所以なり。

尙予はライブニッツが *Characteristica Universalis* の企を以て何等か吾人の意圖に似たるものにあらずりしやを想ふ。

且つ全局に亘りて、吾人の得たる所は、全體に亘る一種の進化論的思想の發展、若くは *Gedankengang*

思想の進行と稱するものゝ存することなり。

又吾人の態度は *Polemik* を避けて、常に體系を主張し來りたることなり。且つ物理學、數學、哲學三種の態様を是認するに於ては頗る寛容なる態度を取るにあらざるよりは其の一を採りて、他を失はんことを氣遣ふべき理由ありたることなり。

以上述ぶる如き特徴を以て我がロギスティックは立てり。之を他の諸系統と比較するも亦一與なるべしと信すれども、茲には爲さず。兎に角予の二十有餘年の考察の中心を此處に羅列することを得たるは著者の欽幸に耐えざる所なり。古今東西の哲人の裨益を得る所極めて大ならん。予は謹んで此等の先哲に感謝す。

306
578

大正十三年十月二十日印刷
大正十三年十月廿五日發行

大正十三年十月二十日印刷
大正十三年十月廿五日發行

著者 齋木延次郎

印刷者 山田純一郎

印刷所 山田印刷所

電話一〇一八番
振替福岡五四六番

終

